

# 「文化」のさまざまなかたち

## —多文化の時代に—

学産提携あるいは地域への開放ということばが飛びかい、大学・短大の存在意義が鋭く問い直されつつある現在、大学紀要についても、学術機関であることの要件を満たし、専任教員に業績発表の場を提供するというこれまでの意味づけからはひとまずはなれて、その社会的な機能と役割について見直して見る必要があるであろう。

おりしも、長野県短期大学は改組の節目を迎え、今春から新しいスタートをきることになった。この機会をとらえて、本学紀要委員会では、今後の紀要の在りかたをめぐり、従来の学術誌としての側面に加えて、本学の知的資産を社会に還元するという観点からも検討を重ね、さしあたり本号では特集を組むことを企画した。従来のように個別の主題を扱う論文が端然と並んでいるだけの紀要では、それぞれの論稿が社会への真摯な問いかけを含むものではあっても、全体としてわれわれの知的営みの成果が社会に均霑されているという印象に乏しいのではないかと、したがって多岐にわたる専門分野に携わっている本学の教員および関係者の知的個性を、ときには特定の主題にそくして総和するかたちで世に問う試みもまた必要なのではないかと考えられるからである。

本号の特集テーマ「文化のさまざまなかたち—多文化の時代に」は、たんに多文化コミュニケーション学科の新設を記念することのみを企図しているわけではない。この主題に込められた意図は、「多文化」、ひいては「文化」ということばの内実を、本学全体として、地域社会の視点も交えながらまづ問い直してみるところにある。ここで期待されていたのは、政治や経済における思想的側面はもとより、いわゆる下位文化や階層文化までも含めた広い意味合いでの「文化」を、それぞれの執筆者が自らの専門性を生かすなかで再吟味し、その総和として、本学なりの「多文化」をめぐる多様な世界がそこに織りなされることであった。本委員会としては、当初「小特集」を想定していたにもかかわらず、幸いも本稿の論稿をえることができ、名実ともに「特集」の名に値する紀要を編むことができたと自負している。また、本号からは非常勤講師の先生方にも御投稿いただけるようになったが、さっそく御寄稿いただいた論稿によって、特集をより充実した内容にすることができたのは幸いであった。真摯な読者であれば、特集におさめられたいづれの論文のなかにも、そこで論じられている対象との時間的・空間的な隔たりはさておき、その主題と自らが営む生活との間に何らかのつながりがあることを見出すであろうし、また特集の全体からは普段は見過ごしがちな「文化」というものの多層性に気づかされることであろう。

本委員会は、今後もこうした特集が積極的に企画されてゆくことを強く望んでいる。とはいえ、紀要編集の重心が特集に偏するあまり、本来の専門分野における個々の教員の地道な学問的営為が制約されるようなことがあってはならず、紀要が従来どおり自由な主題による投稿の場としても保証されなければならないことは言うまでもない。

地域との連携が要請される時代にあって、本学も学術機関として社会的に寄与しうる道を模索してゆかなければならないであろう。しかし、本学の拠って立つ基盤があくまで学術であって狭い意味での技術ではない以上、その社会への貢献内容にも学問的な広がりや深みを失うことがあってはなるまい。装丁も新たに特集を試みた本号が、本学の展望を開いてゆくひとつの糸口となれば幸いである。